

## 編集後記

2008年3月16日に『創価教育』創刊号を刊行してから、本紀要は5年目の節目を迎えることとなった。今までご支援いただいた関係者の方々に心より感謝を申し上げます。特に去年は未曾有の大災害が日本を襲い、東北地方をはじめ東日本に甚大な影響を及ぼした東日本大震災によってわれわれは深刻な試練に見舞われているといえよう。被災された方々に謹んでお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます次第である。

今回も平和・外交・教育などさまざまな分野からの論文や資料が寄せられており、国や時代を超えた創価教育研究のさらなる厚みを感じさせるものとなった。論文は牧口・戸田・池田について各1本ずつ収録している。まず、有本論文「A Note to Examine the Possibility for Makiguchi Pedagogy to be able to Cover the Philosophy of SBCE」では『創価教育学体系』に記された教育哲学が、いかにSBCE（スクール・ベースド・カリキュラム・デヴェロップメントの略。学校ベースのカリキュラム開発や形成的アセスメントを含む）の理念と関連し、牧口の先見性を示すものとなっているかについて、ピアジェやデューイの教育論を概観しながら考察している。富岡論文「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（4）」は、草創期の女子学園の卒業生へのインタビューの追加調査であるが、当時の創立者と学園生の絆について分析したオーラル・ヒストリーの手法をとっている。塩原論文「支部沈黙と戸田甚一」では、もと小学校の教師と教え子という関係であった支部沈黙と戸田の間のその後の交友関係について、戸田が同人誌『囁き』に投稿した20の作品を手掛かりに考察している。

研究ノートは5本掲載している。中山論考「池田大作の平和観と世界秩序構想についての一考察」では、21世紀における平和のための世界秩序構想について、池田の平和観を通して論じている。伊藤論考「斎藤正二の牧口常三郎研究」では、牧口研究の第一人者・斎藤正二氏の数多い業績を注釈的研究、評伝的研究、思想史的研究の3つに分けて、それぞれにおける代表的発見の要点を概観している。富岡報告「NYのルネサンス・チャータースクールを訪問して」では、創価教育のアメリカにおける実践的側面に着目し、牧口の教育哲学を学校設立の理念やカリキュラムに一部取り入れた、ニューヨーク州にあるルネサンス・チャータースクールを見学したりレポートである。高橋報告は、中国における池田思想研究の動向についての連載の続編である。2011年に開催された「池田大作思想研究サミット」や「青年と21世紀平和友好“金の橋”フォーラム」などのシンポジウムの開催報告のほか、新設の池田大作研究機関についても紹介されている。汪論考「日中関係における画期的な提言」は、日中国交正常化40周年を記念したものである。1968年に池田がおこなった「日中国交正常化提言」について、その理論的・思想的基盤や当時の歴史的背景をふまえて再検討し、日中両国における歴史的意義について論じている。

講演の部では、高崎講演「戦時下の《1943年夏》を語る」を収録した。これは昭和

16 (1941) ~18 (1943) 年までの講演者自身の戦争体験を通して、当時の歴史的背景および創価教育学会の弾圧についての貴重な証言が提供されている。

資料紹介として、今回は4点収録した。斎藤正二『『人生地理学』補注』は、牧口常三郎著『人生地理学』の「第三篇 地球を舞台にしての人類生活現象／第二十三章 社会」について斎藤氏が執筆した補注の未発表部分を、氏の御遺族の諒解を得て掲載させていただいたものである。「中等学校入学試験の話と愛児の優等化(3)」は、今まで本紀要で連載してきた戸田の処女作の翻刻の完結編となっており、貴重な歴史資料といえよう。「戸田甚一が同人誌『囁き』に投稿した20の作品」は、先に紹介した塩原論文の引用資料ともなっており、両者を参照しながら一読することをすすめたい。「『新教』・『教育改造』索引」は、創価教育学会が発行した『新教』およびその改題誌である『教育改造』(第5巻第12号別冊および第6巻第1号~第7号)の索引である。本紀要の前身である『創価教育研究』第5号(2006年出版)に収録されている「創価教育研究センター所蔵『新教材集録』索引」に続くものであり、その当時の創価教育学会の実践の歩みを伺い知ることができるものになっている。

このように概観してみると、時代も戦前、戦時下、そして戦後の現在とさまざまであり、扱うテーマも教育哲学、教育実践、平和観、研究報告など多岐にわたっているが、新しい試みが見られた研究が少なくない。たとえば、今回収録された有本論文は、教育学の分野であるカリキュラム開発という問題を通して、創価教育の理念を考察するという新しい着眼点を提供する研究であった。このように既存の概念や時事問題と創価教育との関連に焦点をあてることにより、その独自性や特徴を浮き彫りにする研究も今後求められていくであろう。また、池田の平和観についての論考からは、その独自性を20世紀から現在に至るまでの歴史的変遷を通して論じており、彼の人間主義、平和主義の根幹の思想とその可能性について問題提起をおこなっているという点で、今後の池田の平和思想に関する基礎的な研究視座を与えてくれる。さらに、今回は本紀要では珍しいスタイルである海外の学校の見学記を収録しているが、創価教育の実践面についての研究が今後も発展していくことを願うものである。また前年同様、中国における池田思想研究の動向についての報告だけでなく、日中国交正常化40周年を記念した論考も寄せられ、創価教育の世界における広がりをうかがうことができよう。さらに、資料についても充実したボリュームとなっており、今後も続々と創価教育の理念と実践を深く考察し、後世に残る研究が出てくることを願ってやまない。

最後に今回の紀要作成に際し、矢島印刷をはじめご協力・ご尽力いただいた方々に、この場をかりて篤く御礼を申し上げたい。

2012年3月16日 (H.T)